

水玉模様の紙おむつ

竹内 武智子

3月11日の大震災の後は、日本列島のどこかで毎日強い余震が起きている。4月7日の深夜も大きく揺れて、いきなり家中が真っ暗闇になり電化製品の音も止まってしまった。

入院中の夫が気になるが、どうする事も出来ない。翌日、交差点の信号機も作動していない道路を車で30分かけて病院に辿り着いた。事務室は仄暗く、業務停止状態である。昼食の時間だったので、歩ける患者や、車椅子の人が、介護職員に手助けされながら食事中だった。窓から入る明かりだけでは普段より暗く、食事風景がモノクロに見える。

ホールを通り抜け、夫のいる病室の入口に立った時、息を呑んでしまった。4人部屋に9台のベッドが盛り上がる様に並べられ、部屋中が蠢く光景は凄まじい熱を発している。

夫のベッドは入口近くだったので、すぐ見つけたが、狭いので横歩きになってやっと側に行けた。

電気なしでは、床擦れ予防のエアマットも使えず、代りにクッションやバスタオルを丸めて体位を維持してくれていた。職員は黙々と機敏に働いている。気管切開の人、痰の吸引器を使用する患者を一部屋に集中避難させたらしい。

夜中の停電を、限られた人数の夜勤者で、どんなに大変だったか想像もつかないが、勤務時間前に駆け付けた人、休み返上で応援に来た職員など、患者を守る為に懸命に動いてくれた事を知った。

この東日本大震災の死者、行方不明は2万人を越す。働き盛りも子供も命を奪われてしまったと言うのに、5年も寝たきりの我が夫。これから回復して社会貢献が出来る筈もない。ただただ、申し訳なく、消えてしまいたいと思った。そんな私にベテラン看護師が「今まで充分働いてきてくれた人たちですから、出来る限りの看護をさせて戴きますよ」と、笑顔さえ見せたのである。

自分たち夫婦の年月考えて、滅入った気分でも布を捲いたら、夫が水玉模様のおむつをしていることに気がついた。震災による品不足の為、別な業者から取り寄せた物と聞く。青い小さな水玉模様が何とも可愛いらしく、思わずクスツと笑ったら、もやもやが晴れた。

そうだ。限りなく、いとおいしい命がここにある。